



想いに引っ張られる研究

神戸大学 経済経営研究所

准教授 江夏 幾多郎

3月末以降、数名の研究仲間と一緒に、新型コロナウイルスの流行が就労者の心理や行動に及ぼす影響について研究しています。4月中旬に行った第一次調査では4000人を超える方々からの回答をいただき、これまでに2篇の(分厚い)報告書¹を公開しました。リッチなデータを利用したいろんな分析ができそうなので、この調査に関連した執筆や講演の依頼に対応しながら、分析モデルについて日々思案しています。

これまで、研究者として様々な調査に関わったり、自分で調査の構想を練り上げたりしてきましたが、今回の調査研究の特徴は「想いに引っ張られた瞬発力」の強さにあると、自分では思います。歴史的な事態に直面している一市民として、自分の能力を活かしてできることはなんだろうと考えた時、自分たちを取り巻く「今」をリアルタイムで記述し、その成果を社会に向けて即時的に公表する、という結論に至りました。

ある出来事について数年間かけて内省し、内省した結果をまとめる。着目する事象は基本的に過去のこと、場合によっては数十年、数百年前ですらある。当事者の営為を冷静に観察し、記述する。こういうものが社会科学の基本的なスタイルだとしたら、今私たちが行っている研究は、真逆で異端の、そもそも研究と呼べない代物と評することもできるかもしれません。

私たちが「今」にこだわる理由の際たるものとして、社会のリーダーとされている人々も含めた誰もが、現状や将来に対して明確な見通しを持っていない(ように見える)、ということがあります。私たち自身、講義や学会のオンライン化への対応など、ここ数ヶ月で様々な活動に新たに従事することになりました。しかし、そうした活動が現状や将来についての明確な見通しに基づいているのか、あるいは、そうした活動によって現場や将来についての見通しがよくなったのかというと、大いに疑問符がつきます。暗中模索の中で心身を消耗させているというのが、多くの人々の実感なのではないでしょうか。

¹ 「新型コロナウイルス流行下で就労者や企業が経験する変化—デモグラフィック要因の影響—」

<https://www.rieb.kobe-u.ac.jp/academic/ra/dp/Japanese/dp2020-J08.html>

「新型コロナウイルス感染症の流行への対応が、就労者の心理・行動に与える影響」

https://www.works-i.com/research/paper/discussionpaper/item/DP_0031.pdf

曖昧な状況だからこそ、目の前を晴らす視座が欲しい。曖昧でしかあり得ないのなら、何故そうなのかを知りたい。こうした知見を、同じ時代や場所を生きる人々と「直接」共有したい。こうした個人的な想いが、研究成果の即時公表につながっています。成果公表のための主な手段は、神戸大学を含めた研究機関のディスカッション・ペーパーや、SNSでの結果解説や意見表明です。反面、研究者の成果公表手段として最も一般的で、かつ価値があるとされているのは、レフェリー付きジャーナルへの掲載です。この価値は、自分たち研究グループの誰もが認めていますし、それを狙った活動を日々行っています。しかし、査読を通過するのに要する日数や、査読を通過するために必要な調査設計や論文スタイルにおける「お作法」を考えると、少なくとも今の時点では、発信媒体としての優先順位としてはトップになりえません。

私が「コロナ禍における就労」を調査したいという想いをSNSで吐露したのが3月末だったのですが、すぐに数名の大学および民間の研究者からの共感・賛同を得ました。そして、数日内には、1)大学の研究者が中心になって調査表を設計する、2)サンプルの確保は民間の調査研究機関が行う、という協業の体制が確立し、2週間ほどで大規模調査が実施できました。日頃の研究の進展のスピードとは全く異なる、目を見張るような速さで、新たなプロジェクトが立ち上がり、今も進んでいます。担当者による想いが無い研究はない（と信じたい）わけですが、想いをじっくり熟成させて成果を出すのではなく、想いをその場で爆発させて成果を出すことができたのは、研究者として新たな「武器」を得ることにつながったと実感しています。

我々の調査研究のバックボーンは経営学、組織行動論、労働社会学で、様々な要因間の相関関係や因果関係を解明することを念頭においた調査票設計を行いました。4月時点でここまで網羅的かつ体系的な調査は、国内外を見ても存在していないと自負しています。良質なデータを手に入れた以上、単に「一番乗り」を誇るのではなく、データをちゃんと活かした研究成果を生み出さないといけないと胸に刻んでいます。速報的な報告書を公表して研究プロジェクトを終わらせるのではなく、データを丹念に、かつ多角的に分析して、著書の出版やレフェリー付きジャーナルへの掲載、さらには「日本の事例」の海外発信の道筋も模索しています。

最後に、調査票の設計や研究成果の産出のための研究仲間とのやりとりについて、少し述べます。今回の研究プロジェクトは、これまで完全にオンラインで進展しています。にもかかわらず、ビデオ会議やSNS/チャット上のやりとりは極めて密度の高いものです。研究話と余談が自然に入り混じる、大学院生の研究室（の理想像）を思わせる場がオンライン上に形成されました。これも、この研究テーマに対する想い、さらにはその発散のあり方についての理解が共有されているからなのでしょう。